

風車

紀州の歴史と文化の風

文化財センター季刊情報誌【かざぐるま】

2016 冬号 **77**

公益財団法人 和歌山県文化財センター

特集 旧西村家住宅の保存修理



特集 「建造物 旧西村家住宅」の保存修理

一、はじめに

新宮市では、今年の4月から3年がかりで国の重要文化財である旧西村家住宅（西村記念館）の保存修理工事を進めています。

旧西村家住宅は、西村伊作氏（以下「伊作氏」）が自ら設計した3度目の自邸で、大正3（1914）年から翌年にかけて建てられた洋風の建物です。1階の間取りは、西側にある玄関を入ると東へ廊下が延び、その南側には居間（リビング）と食堂（ダイニング）、北側には台所や事務室が並びます（図1）。2階には家族の寝室や和室、浴室などがあります。屋根裏部分も部屋として用いられ、写真用の暗室が作られています。台所の下には地下室が設けられ、ポイラー、かまど、洗濯槽などが置かれています。

家族の生活空間を中心とした間取りと、給排水設備や給湯設備も有するなど、現在の生活では当たり前となった住宅スタイルを実現させた初期の建物として、また、そ

のすがたを今日まで伝える希少な建物として、平成22年6月に国の重要文化財に指定されました。

昭和53年より西村記念館として一般に公開され、平成10年からは建物の寄贈を受けた新宮市が管理を引き継いでいます。建築後100年が経過した建物は、地盤の一部が沈んでしまったことで、屋根面や壁面に破損が生じ、その破損部分が雨漏りなどによってさらに傷み、構造的にも弱い状態となつて

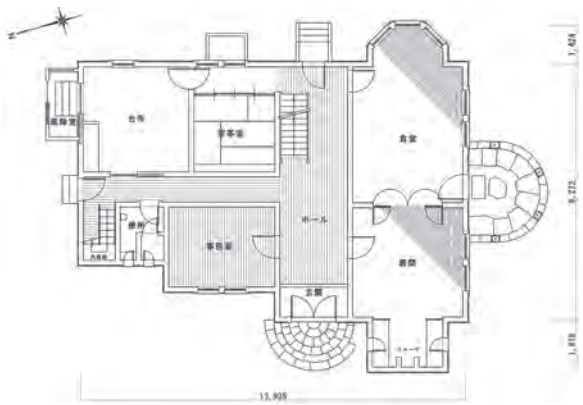


図1. 主屋1階平面図

玄関を入ると廊下（ホール）が一直線に延び、その右側（南）に居間と食堂を、左側（北）には台所と家事室、事務室などを配置しています。



写真2. 主屋の外観を南西より見る

軒先には「ガンギ」と呼ぶ、雨風除けの縦板が付いています。南面2階のバルコニーの下には半円形平面の石敷きが残り、下をテラス、その上をバルコニーとしてバルコニーに附属させた時期のあったことが、古写真からもわかっています。



写真1. 主屋の外観を南東より見る

手前の張り出している部分が食堂で、その奥に居間が続きます。その上方には寝室が2室並びます。建物の南側と東側に開かれた庭に面する部屋は、いずれも家族のための空間で占められています。



写真3. 伊佐田通りより建設中の素屋根を見る

建物は、外壁の破損が全面的に目立っていました。左奥に見える緑色屋根の建物は、伊作氏の設計で大正15(1926)年に道向かいに建設された、旧チャップマン邸です。

いました。そこで今回、地盤の強化を図りながら、建物の破損箇所を補修する計画の保存修理工事を行うことになりました。

工事は7月に着手し、まずは「素屋根」と呼んでいる、建物を包む覆屋を建設しました(写真3)。現在は、その覆屋の中で、屋根の瓦や外部の壁など、建物を組み立てていく時とは逆の順に、分解作業を進めています(写真4、5、表紙写真)。

二、西村伊作氏について

伊作氏は、十人いる新宮市の名誉市民の一人です。『県民の友』の連載記事「わかやまの偉人たち」などでも「日常の生活を

芸術にまで高めようとした大正のモダニスト」として紹介される方ですが、少し難しい感じの表現ですね。

明治17(1884)年新宮市に生まれた伊作氏は、洋書などから独学で建築を学び、21歳で最初の自邸(平屋建)を建築します。数年後には、家族の増加に合わせてその建物を移築・増築(二階建)し、さらには現在の建物へと建て替えをしました。同じ頃には新宮教会の会堂の改修なども手掛けています。

当時は明治維新から半世紀近くが経っていました。一般住宅のスタイルは依然として伝統的な部分が残っており、たとえば、間取りの中心は来客をもてなす和室(座敷)でありました。

そのような時期に伊作氏は、自邸の設計作業を通して得られた知識や経験を、一部に反省も踏まえながら書物としてまとめ、世間へ発信していきます。また、子どもたちの教育を通して得られたことについても同様に発信しました。

その目的は、日本人、特に若者たちが自由で豊かな思想を育んでいけるように、そのためにもまずは快適で楽しみのある生活を送るべきで、そうした生活が実現できる住宅が不可欠である、と考えたのでした。そうした思いの象徴とも言えるのが、現在の建物なのです。



写真5. 屋根下地を北東より見る

素屋根(覆屋)の中で、外部の壁や屋根の瓦を取り外した状況です。雨漏りを生じていた部分では、下地の腐朽が進んで穴が開いてしまっていました。板の種類が異なる部分は、過去に補修されて来た部分になります。



写真4. 瓦屋根を北東より見る

建物の北東部分では、地盤の沈下が進んだために、軸組から大きく変形し、その影響で屋根瓦もずれて、そこから生じた雨漏りによって腐朽などの破損がさらに進行してしまう状態となっていました。

三、住宅に対する伊作氏の思い

では実際、伊作氏が著書の中でどういふことを提言したのか、これがなかなか細かい。いくつか具体例を挙げます。

まずは立地について。学校やお店、病院との位置関係、公共の設備や治安、災害時の安全にいたるまで考えましよう、今時の人たちと何ら変わりません。住宅の間取りについては、海外の住宅を検証し、日本との共通点を拾い出しながら、部屋はこの建物（図1）の様に配置するのが良く、家族の人数に合わせて対応できるように工夫もすること。実際に2階の一室は、板敷きの部屋に畳を敷き込んで、子ども部屋へと変えた様です。

外観についても細かい。室内に光を取り込み易い様に、上げ下げ式のガラス窓（写真6）を多用していますが、そこでも縦や横に整然と配置するべき、格子（ガラスを区分けしている細い部材）の本数や大きさにも気を配ること、等々。住む人も自分が生活していく住宅なのだから、きちんと理解して建てるのが当たり前、といったところでしょうか。

しかし、デザインの何もかもを洋風にした訳ではありませんでした。軒先には紀南地方で「ガンギ」と称する縦板を付けて雨



写真6. 分解中の上げ下げ式ガラス窓

写真は2階北面。ガラス窓と重さを釣り合わせた分銅をワイヤーで天秤のように繋ぐことで、望む位置で窓が止まる仕組みとなっています。

風除けとしています。石積みの塀（写真3）では民家などに多い玉石を用いています。これらの施工に対して伊作氏は、建築の様式はその土地ごとの状態に適したものが存在するはずで、伝統に倣うことで和洋折衷もうまく行くのでは、と考えました。この試みは、奈良県下北山村にある、母方の実家の外観からもうかがえます（写真7、8）。2ページ下段の写真に合わせて撮影したのですが、全体の雰囲気は良く似ています。そうした伊作氏の思いは、当時の国民にも広く受け容れられ、自ら「素人建築家」と称しつつも設計の注文が集まり、設計事務所を構えるまでとなります。



写真8. 下北山村にある母方の実家の表門（裏側を見る）
背面の庇を玄関脇の居間、側面の庇をベランダ、に見立ると、全体の雰囲気が似ています。単なる偶然とは言えない感じがします。



写真7. 下北山村にある母方の実家の表門（表側を見る）
伊作氏が少年時代に暮らした祖母の家の表門で、長屋門形式の建物です。切妻屋根の側面のデザインは、旧西村家住宅のそれと良く似ています。

四、修理中にわかって来たこと

もう一つ、旧西村家住宅で特徴的な部分が外部の壁です。それは、仕上がり面に表情を持たせるために、漆喰の中へ玉砂利をたくさん混ぜて塗ってあることです。その玉砂利の大きさは、米粒ほどから蚕豆ほどまで様々です。さらに、その外壁には蔦を生い茂らせていました（写真9）。自然である庭と人工的である建物とを調和させる狙いであった様ですが、思いのほか壁の傷みが早かったらしく、修理中の調査から、大正後期には東面と南面で大規模な補修が行われたことがわかってきました（図2）。その際には、下地となる木部も補修され



写真9. 大正8年（1919）頃の東面外観

著書に掲載された写真。壁面の広範囲に蔦を這わせた様子がかがえます。上げ下げ式のガラス窓の下半には網戸も存在しています。

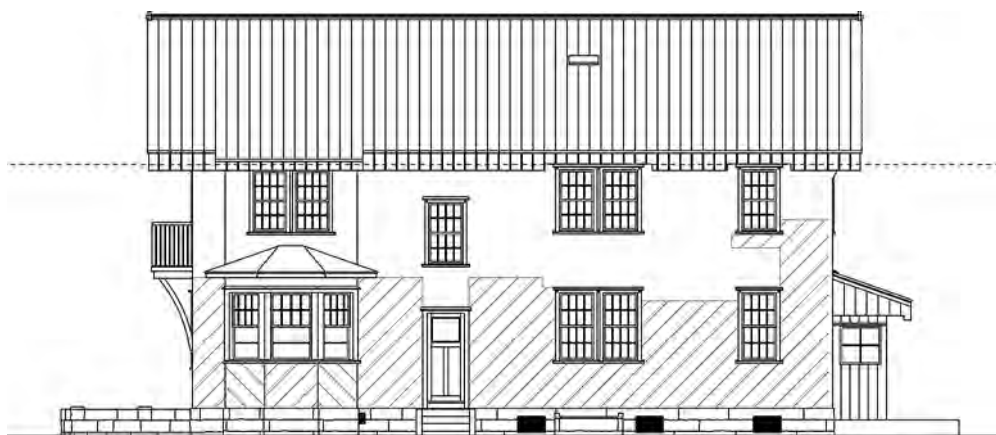


図2. 大正後期の主屋東面での補修内容

修理中の調査で、1階部分（図中の網掛け範囲）では下地の補修が行われており、軒下（図中の破線より下方）では、下塗りをモルタル塗りへと変更されていることがわかりました。補修の内容からも、当時の蔦による壁面の破損の様子が想像できそうです。

て、下塗りも砂漆喰塗りからモルタル塗りへと変更し、漆喰塗りに混ぜた玉砂利も細かくされました（写真10）。補修後も変わらず蔦を生い茂らせており、そうしたこだわりを実現するための対処とも言えそうです。ちなみに伊作氏は、大正15年に自邸の

五、おわりに

道向かいで新宮教会の宣教師チャップマンの住宅を設計していますが、その外壁でも小粒の玉砂利の入った漆喰塗りを採用しています。

その他にも敷地内では改変が行われるなど、この建物が実験的な住宅であった部分がかがえてきています。これから来年の春にかけて建物の分解作業が進められます。今後の調査では、建物の変遷（修理や改造の経緯）だけでなく、伊作氏が当時この建物に込めた思いなどもより明らかにしていければと思っています。（下津健太郎）



写真10. 外壁の玉砂利漆喰塗りの構成比較

左半が建築当初の外壁、右半が大正後期に塗り直された外壁で、同面積（黄色部分）に含まれる玉砂利を洗い出し、石の粒度や内容物などを比較してみました。両者には、大粒の石が含まれる割合やスサの量などに明らかな違いのあることが確認できました。



吉原遺跡発掘調査

吉原遺跡は、紀伊半島西側中央部に位置し、日高川右岸河口から日ノ御崎までの海岸に沿って展開する日高郡美浜町に所在する遺跡です。今回の発掘調査地は、吉原遺跡の中でも最も南東に位置し、煙樹ヶ浜に隣接する海岸砂丘上に位置します。発掘調査は、美浜町から委託を受け、平成28年8月から同年9月にかけて都市防災総合推進事業に伴い実施しました。発掘調査区は、4箇所に分けて実施しました。

発掘調査の結果、全ての調査区で中世から近世とみられる火葬墓等を確認しました。火葬墓は、幅1.0～1.4m、長さ1.0～2.0mの楕円形又は不整形をしており、残存する深さは0.3m程度と比較的残存状況は良好でした。各火葬墓の埋土は、おおむね黒褐色で、埋土からは、多量の焼けた人骨及び木炭、鉄釘、銭貨、土器などが出土しました。ほぼ全ての火葬墓から鉄釘が出土することや、

遺構の中には明瞭に人骨がまとまった状態で出土するものがあること、また、火葬墓の墓壙壁に火を被けて焼け固まった状況がみられないこと等から、各埋葬場所とは別の場所で茶毘に付されたのち、釘で組み立てられた木箱等に遺骨が拾い収められ、各遺構に埋葬されたものと考えられます。また、これらの遺構の時期は、火葬墓に副葬されたとみられる銭貨や土器からみて、中



調査区4 全景（西から）



火葬墓 埋土土層断面

世から近世とわかりました。以上のように、今回の発掘調査により、当地域では中近世において火葬を行い、それを一箇所埋葬していたことが判明しました。吉原遺跡は当地域における中近世の砂丘の利用や埋葬方法等の埋葬習俗を復元するうえで、重要な遺跡であると評価できます。（金澤 舞）

文化財建造物修理技術者の道具 ⑥ 掃除の心得

「これは使えない写真だね」と現場で撮った写真を見てもらったときに指摘されたことがあります。写真のなかに撮影準備の問題が浮きぼりになっていたようです。その問題とは、①取り外したばかりの部材や道具が散らかったまま写っている、②部材のつなぎ目が塵や土埃等で見えにくい、③木くずや壁土などの破片を掃除し忘れていた場所がある、というものでした。確かに気が付いてしまうと、そちらに目が行って、建築の特徴や構造が意識から掻き消されてしまいそうになります。撮影の意図に関係ない情報は減らすように、注意を払う必要があります。

その後の機会に、きちんと片づけをして「さあ、撮るぞ」とファインダーを覗くと、それまでは見えなかった所にまで注意力が働いて、今度は電動工具の配線や人影、日光の加減が気になり始めて、なかなか納得のいく写真が撮影できなくなっていました。現場の写真を一枚撮るのも準備に手間がかかるということ、掃除や整理整頓を手抜きすると後悔するということを実感しました。

今度こそと撮影した写真を見せると、次は構図に問題があると指摘されていました。「何を伝えたい写真なのか判らない。掃除や片づけをしているときに何も考えてないね」

掃除をするのにも、頭を働かせなければなりません・・・
(大給友樹)



掃除後



掃除前

掃除をすると部材のつなぎ目がわかりやすくなります。

きのくに歴史小話

～きのくにれきしこぼなし～

お知らせ 埋蔵文化財課

当センターのHPにおいて、埋蔵文化財に係る『刊行図書類』、『資料・データ』の項目を大幅に更新し、左記のような資料のPDFをダウンロードしていただけるようになりました。

(1) 刊行図書類

① 季刊情報誌『風車』

・64号(2013・11・8刊行)から76号(2016・9・30刊行)

(2) 資料・データ

① 発掘調査報告書122冊

② シンポジウム要旨集等 シンポジウム・講演会・報告会

・紀中・紀南の旗頭―湯川氏の城・館・城下町―(2016・1・30刊行)

・和歌山城と城下町の風景(2015・3・8刊行)

・紀ノ川北岸の古墳文化―初期須恵器・埴輪・陶棺からみた地域の歴史―(2014・2・1刊行)

・自然災害と考古学―発掘調査から防災を考える―(2012・1・22刊行)

・地宝のひびき―和歌山県内文化財調査報告会資料―

(2013・9・1)～2016・7・16刊行)

③ 現地説明会資料

・平成27・28年度実施資料

④ その他 歩いて知るきのくに歴史探訪

・湯川氏の故地を訪ねる(2016・1・30刊行)

・藤白神社から琴ノ浦温山荘園までを巡る(2014・10・25刊行)

・竈山神社と周辺の遺跡を巡る(2013・10・26刊行)

・慈尊院と高野山町石道(2012・10・20刊行)

発掘調査概要パンフレット

・県指定史跡 水軒堤防(2016 刊行)

・中飯降遺跡(2015・3・27刊行)

※(公財)和歌山県文化財センターHP: <http://www.wabunse.or.jp/>

7

催し物案内 和歌山県内の文化財関係イベント情報(2016年冬～2017年春)

和歌山県立紀伊風土記の丘

- 冬期企画展「きのくにの弥生文化～後期社会の変革～」 2017年 1月14日(土)～2月19日(日)
- 春期企画展「古代のアクセサリー」 2017年 3月14日(火)～5月14日(日)
- フカミンのおしゃべり考古学⑤ 2017年 1月20日(金)
- 風土記講座④学芸員講座 2017年 2月 5日(日)
- フカミンのおしゃべり考古学⑥ 2017年 3月17日(金)
- 古墳ガイドツアー③ 2017年 3月19日(日)

和歌山県立博物館

- 企画展「和歌浦・屏風・名所」 2016年12月 3日(土)～2017年 1月15日(日)
- 企画展「有田川中流域の仏教文化―重要文化財・安楽寺多宝小塔修理完成記念―」
2017年 1月21日(土)～ 3月 5日(日)
- 企画展「躍動する紀南武士―安宅氏と小山氏―」 2017年 3月11日(土)～ 4月16日(日)

和歌山市立博物館

- 特別陳列「歴史を語る道具たち」 2017年 1月11日(水)～2月26日(日)

高野山霊宝館

- 秋期企画展「真田丸」の時代と高野山」 2016年10月 8日(土)～2017年 1月15日(日)

掲載内容は変更される可能性があります。詳細は各施設へお問い合わせください。

目次

- 1 表紙「旧西村家住宅の保存修理」
・上段：外観(西)、踏石の分解、瓦の分解、外観(南)
・中央：軒まわり分解中の様子
・下段：網戸に蟬、外壁内の玉砂利比較、庭先の枇杷
土居葺の清掃、外観(北東)
- 2 特集「建造物 旧西村家住宅」の保存修理
- 6 埋蔵文化財課 短信「吉原遺跡発掘調査」
- 7 きのくに歴史小話「文化財建造物修理技術者の道具⑥」掃除の心得
「お知らせ 埋蔵文化財課」
- 8 催し物案内

風車77(2016・冬号)

平成28年12月28日

(公財)和歌山県文化財センター

URL <http://www.wabunse.or.jp>

(公財)和歌山県文化財センター

【事務局】

〒640-8301 和歌山市岩橋1263-1

TEL 073-472-3710

FAX 073-474-2270

maizou-1@wabunse.or.jp